

C10a 教育系大学の天文観測施設の利用と公開 - 福岡教育大学の場合 -

平井正則、川野あき（福岡教育大学・地学）

教員養成系 11 国立単科大学のひとつである福岡教育大学では地学関連施設として 1981 年 6.6 メートル観測ドーム、40 センチカセグレン反射望遠鏡などの天文観測施設が設置された、以来、21 年間、学部、小、中、高校教員および障害児教育教員養成の教科理科のカリキュラムに含まれる演習、実験や大学院修士課程（理科教育専攻）院生を中心に活用されてきた。これらの「業務」に加えて、大学公開講座から地域子供会の観望会などまで、学外での天文教育、天文現象の紹介や話題を提供してきた。教員養成系国立大学が国費により公平な教員養成機会の提供と国家的な使命を果たす教員養成の目的により、大規模な組織・施設、財源を要する義務教育課程の小学校教員、中学校教員、さらには、国家的援助を必須とする障害児教員の養成に重心があることは周知の通りである。これらの「業務」に制限を受けながら福岡教育大学ではその目標である「ゆりかごから墓場まで」の人材育成というスローガンのもとに広く自然と人の出会いの機会を天文現象の中に発見できるよう天文施設を公開するという意思で現場教員グループの要望、地域住民要望に応じて公開を行ってきた。さらには都会の夜の明るさが理科授業実践の際問題となる等の報告を受けて、市民を対象にした夜空の明るさについての公開講座を企画、実行し、積極的に取り組んだ。また、九州大学理学部惑星学科学生の研修、北九州市立医科大学学生グループなど地域の大学にも公開している。現場教員の活躍を援助し、彼らの天文教育のリーダーシップを支援することを通して公開の実をあげるといった公開のあり方が教員養成系大学施設公開の基本とならざるを得ない。そのような目標や考えが実際どのくらい市民をはじめ、教育現場の児童、生徒に影響したかを測ることもまた重要なことだと認識している。これらの経験を総括することから公開に係る問題点や今後の課題について議論する。